

第11部会

十善道による衆生の教化が説かれており、自ら守り人に教え教化するという自利利他の両者を兼ね備えた大乘戒としての特徴が見られ、五戒や八齋戒といった在家信者に対する戒が菩薩の實踐として説かれていることから、大乘戒は、大乘の修行と深い関わりを持ち、僧伽を離れて在家菩薩としてこれらの戒を實踐していたことを推察することができる。しかし、この五戒や八齋戒は戒波羅蜜の説明ではなく、十善道こそが菩薩の實踐する戒波羅蜜であると説かれている。

十善道こそが菩薩の實踐する戒波羅蜜であると説かれたのと同じように、菩薩の修行と悟りへの段階を結びつける華嚴經や十地經においても、清淨戒において十善の内容を明らかにし十善道の實踐を説いている。十地經・華嚴經十地品においては三聚淨戒という明確な表現は見られないが、十地經の注釈書である十地經論では、この清淨戒を發起淨と自体淨の二種の淨から説明し、自体淨について、「離戒淨」「攝善法戒淨」「利益衆生戒淨」の三種の性格を明らかにし、離戒淨が離殺生から正見までの十善であって、これを受戒淨と呼び、十善道を戒として受けるべきものとして捉えており、大乘の早い段階では三聚淨戒の内容が十善戒で理解されていたことが伺われる。

華嚴經十地品では十善道を修するものの、三界を怖れ、大悲心を起こさない場合は声聞乗のものとなり、自ら悟りを得たものの大悲の方便力を欠く場合は独覺乗のものとなり、一切の衆生を救済するために善巧方便をめぐらし、大悲憐愍の心をもって十善を行ずるものを菩薩乗とし、全ての善を含むという意味で、これを十地經論における攝善法戒淨とし、さらに、十不善

道によって地獄餓鬼畜生の三惡道に墮ると説き、さらに十不善道のそれぞれの性格を明らかにして、菩薩が自ら十善道に安住することなく、一切衆生を十善道に導き入れることを、十地經論における利益衆生戒淨としている。

従来、善業・善業道としてとらえられてきた十善が戒波羅蜜の中心としておかれ、また三聚淨戒の攝善法戒や攝衆生戒という考え方にも表れているように、大乘においては戒を禁止という消極的なものではなく、積極的な修善という意味としてとらえていたと考えられる。

雑誌 CEM に見る

現代「アレヴィー」思想の変化

佐 島 隆

トルコ共和国に「アレヴィー」という問題群は以前から知られてはいたが、一九九三年のマドマク事件が契機となり、アレヴィーとは何かという関心が社会的に表面化した。アレヴィーという集団は、スンナ派イスラームが対立概念とされるが、シーア派ではない。しかもアレヴィーは、それに関する研究者によっても異なるが、組織、団体、協会、ワクフ（財団）などによっても異なる、多様性を持つ。

そこで、ここでは、アレヴィーがイスラームの中にあるのか、外にあるのか、という議論を中心にして、特にジェム・ワ

クラブという組織が発行する雑誌を検討することで、アレヴィーに関する考え方の変化を見てみたい。そこからアレヴィー集団のエスニシティの一端を把握することが目的となる。雑誌『ジエム CEM』を発行したジエム・ワクフという組織は、政府やトルコ移民の間でも、影響力の点で、有力な組織である。

これに対して同じアレヴィーであることから区別・線引きはしないが「遠い」位置関係にあると見なす組織は「フェデラシオン」など多数存在する。フェデラシオンという表記は、アナトリアを中心に多数の支部を持つハジ・ベクタシ・ヴェリ文化普及協会など、アレヴィーやベクタシをまとめ上げようとした諸組織の総称である。ヨーロッパ全域のアレヴィー諸組織にもつながるネットワークを持つ。このフェデラシオンの有力な人物が二〇〇五年頃にアレヴィーを一つの宗教 *religion* として考える見解を出した。これはアレヴィーの諸権利を求めて、人権に関する訴訟をヨーロッパの裁判所に起こしたことに関連し、アレヴィーをエスニック集団それも宗教を基軸とした集団として考えようとしたところにあると考えられる。一つの宗教であるならばアレヴィー教ということになり、イスラームの外に位置づけられる。しかし会長が二〇〇五年に死去後その勢力も主張も弱まった。他にも同時期にハジ・ベクタシ・ヴェリ記念祭の国際シンポジウムで或るパネリストが、イスラームの五行を検討してアレヴィーがそれと異なり、ユダヤ教からキリスト教が出たようにイスラームからアレヴィー教が出てよい旨の発言をしていた。

さて雑誌『ジエム』は、副題の変化もあるが、一九六六―六

七年に全十五号、再度一九九一年から二〇〇二年の一二六号まで(番号の打ち方ミスのため七四号を欠く)出ている。十年にわたる変化を知るには良い資料であると考えられる。『ジエム』の編集長・主幹が替わると内容的にも変わる。全体的に見ると一〇五六号まではアビディン・オズギュナイ氏が編集の中心となり、基本的にはアレヴィーとは何か、アレヴィーの一般的知識が多く見られる。九六年に氏が去ると、編集は複数の人が携わり、アレヴィーの多様性を認識し、編集者によるアレヴィーの地域や組織の調査の記事が目にとまる。八〇号あたりから、次第に会長のイツゼッティン・ドアン氏が表面に見られ、会長の主張が出てきていると見て取れる。そして氏からアレヴィー・イスラーム(例えば一一九号、一二三号)という言い方が出ている。そして、これを同化主義と見なす人を批判し、アナトリア・アレヴィーを非難し、トルコ・イスラーム統合論者やメヴレヴィーの人々と一緒に集会を開くまでに変化している。経済危機もあり雑誌は現在、テレビやラジオの放送などの活動に移動したとも考えられる。そしてこの内容の変化は、政権の変化にも対応しているとも見て取れる。(もちろん、イスラームの異端、特にタサツウフ「神秘主義」などに、イスラームの中に位置づける考え方も雑誌に出ている。)

〈本研究は科研・基盤(B)海外「アレヴィー関連諸集団とアレヴィー・エスニシティの生成と展開―トルコ及びヨーロッパ」(研究代表者…佐島隆)の成果の一部である〉